

令和6年度 学校評価結果報告書(高等学校用)

		学校番号	23			
		学 校 名	青森県立三本木高等学校			
		全日制	制課程			
		本校・校舎・分校				
		自己評価実施日	令和7年2月14日(金)			
		学校関係者評価実施日	令和7年2月20日(木)			
		(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成				
		地域の多彩な有識者で構成される学校評議員会を学校関係者評価委員会として位置づけている。 学校評議員 5 名（地域企業代表 1 名、大学関係者 1 名、保護者代表 1 名、後援会代表 1 名、学校協力者 1 名）				
(1) 学校教育目標	「学業の練磨」・「人格の陶冶」・「体力の養成」の校訓のもと、真理と学問を尊重し、心身ともに健康で、国際社会の進展に寄与すべき、積極有為な人材を育成することを教育目標とする。本目標を達成するため、能力と個性に応じた教育活動を通して、「知性の深化」・「徳性の涵養」・「個性の確立」・「自律心の養成」・「心身の鍛錬」の実現に力点を置く。また、校是は「規律ある進学校」・「文武両道」である。					
(2) 現状と課題	本校は、各方面で活躍する多くの人材を輩出している令和8年に創立100年を迎える伝統校である。県内唯一の県立併設型中高一貫校として、また、本県の重点校として、大学進学や部活動などの実績に地域から期待が高い。しかし、少子化の進展よる地域の子どもの減少や鉄道の沿線沿いでないという立地条件等から、入学志願者の減少が続いている。今後、併設型中高一貫校の特色を活かしながら、志の高い入学志願者を増やし、大学進学指導の重点校として地域の期待に応える教育活動が求められている。					
(3) 重点目標	1. 併設型中高一貫教育校の特色を活かす系統的な教育活動の展開					
	2. 良質な授業の展開と生徒の適性に応じた進路実現					
	3. 多様な生徒への対応					
	4. 理数教育及び語学教育の充実と探究型学習の推進					
	5. 快適な職場環境を醸成					
(4) 結果の公表	本校の学校評価は、職員・生徒・保護者・学校評議員を対象に年1回「学校評価アンケート」を実施し、評議員会で評価結果を説明している。また、本校ホームページにおいても公開している。					
自 己 評 価						
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	(10) 次年度への課題と改善策
1	① 高校と附属中学校間、学年や分掌及び教科間の連携と協力の強化 ② 中高6年間を見通した教育計画及び教育活動の充実・発展	① 会議や諸行事（進路講演会、芸術教室など）の実施を通して高校と附属中学校間の職員の連携を密にする。また、中高合同教務会議を開催し、早めの計画と連絡調整を行い、中高それぞれの教育活動が円滑に運営されるように努める。 ② 高校教員による附属中への授業を継続して行う。	① 職員会議、進路講演会、芸術教室を合同で実施した。さらに中高教務部の連携を密にすることで、学校運営に必要な情報を共有できた。 ② 高校教員による附属中への授業を継続して実施した。英語・数学の先取り学習、社会の授業で身に付けた学力を伸長させ、進路実績向上に貢献した。	B	・部活動や対外的な活動の好成績から、文武両道が当たり前になりつつありあって素晴らしいと思う。 ・学校評価で、生徒の「附属中が好きですか」の項目について、他の項目よりも低いように思われる。潜在意識として不安要素があるかもしれない。 ・高校の定員割れが、生徒間の学力差拡大や学習意欲の低下につながる事が懸念される。中学校入試時期（小学校時）から本校の広報活動に努めてほしい。	① 中高合同職員会議は継続し、学校行事の検討や新学習指導要領の研究に努め、併設型中高一貫教育の充実と新教育課程における評価規準について各教科の共通理解を図る。 ② 高校教員による附属中への授業を継続して実施するとともに、英語・数学ばかりでなく、理科・社会の先取り学習を検討する。そのうえで、附属中学生が多くを占めるGSコースにおける課題解決学習を充実させ、総合・学校推薦入試における難関大学合格者増を図る。
2	① 「授業第一主義」と家庭学習を促進する指導の工夫改善 ② ICTを活用した授業改善を通して新しい時代に求められる資質能力の育成	① 校内研究授業・互見授業等を通して指導法の研究を行い、個々の授業改善を図る。学年と教科の連携により家庭学習のための課題の量を掌握し、質を高める。また、苦手科目克服のため「学び直し」ができるように講習等を実施し、幅広い学力層に対応した指導を行う。 ② 生徒に配布されているタブレットを活用した学習を実践する。	① 校内研究授業・互見授業等を通して授業改善と指導力向上に努めた。学年と教科が連携し、家庭学習のための課題を調整し、自学の習慣化に努めた。 ② タブレットを活用した学習、Google Classroomを利用した課題の配布などを行った。	B	・高校1、2年生を中心に、家庭学習時間の減少が心配される。家庭での情報端末の利用時間が増加していないのか、確認する必要がある。 ・学力向上のため、日々の授業実践を大切にし、指導法の更なる工夫を目指して欲しい。 ・ICTを活用した授業改善について、今やどの職場でもICTを活用し、業務の効率化が図られている。学校でも積極的にICTを活用し、授業の効率化や改善を図ってほしい。このことが、教職員の負担軽減につながると思う。	① 新学習指導要領が開始されて3年間が経過したので、各教科や学年で感じた問題点を改善し、より生徒の実態に応じたカリキュラムを目指す。また、併設型中高一貫教育の充実に向けて、カリキュラムマネジメントの見直しを図る。 ② ICT関連の教員研修を推進し、教員の資質向上に努める。
3	① きめ細やかな生徒指導の実践 ② 特別な配慮に必要な生徒への教育相談委員会等による支援体制の活用	① 「規律ある進学校」の実現のため、全ての分掌・学年、関係機関と連携した指導に努める。 ② 不登校傾向や発達障害等の症状を持つ生徒への対応をするため教育相談委員会やスクールカウンセラー、拡大生徒生徒指導会議を活用し、積極的な情報共有に努める。	① 生徒指導を効果的に推進していくため、中高、学年の枠を超えて、全ての生徒に対して、適宜必要な生徒指導を実践している。 ② 学校生活アンケートだけでなく日常のなかからでも、生徒の観察を行い、相談しやすい環境づくりやいじめの未然防止の取組を実施した。教育相談委員会を定期的に実施し、情報共有に努めた。	B	・現状の不登校について、一概に「増加した」「減少した」とは言いにくい。不登校の理由は多種多様であり対応が難しいが、不登校対策に引き続き取り組んで欲しい。	① 「規律ある進学校」の推進のため、校内外における生徒規律の確保に努める。生徒指導をすべての教員が各方面から見守り育てるという共通意思に基づく生徒指導の体制づくりに努める。 ② 日常的な生徒観察と情報共有の徹底により、配慮の必要な生徒の早期把握と教育相談委員会及びスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携を強化する。
4	① 普通コース及びGSコースそれぞれの特色を活かした探究型学習の充実と発展 ② 外部専門機関と連携した理数教育及び語学教育の一層の充実	① SSH事業で培われた探究活動のノウハウを1、2学年のGSコースで受け継ぎ発展させる。また、普通コースにおいても総合的な探究の時間における探究活動を推進する。探究活動は全生徒が取り組む「あおり創造学」の活動を中心とする。 ② 「進学力を高める高校支援事業」の一環として、英語の授業をすべて「英語」で行う授業を行い、英語を通して情報や問題を理解し、自らの意見を発信できる授業を実践する。また、附属中の数学・英語での先取り学習を引継ぐ。	① 1学年GSコースは、大学・企業から講師を招き基礎的探究力・表現力を高めた。2学年のグループによる課題研究はその成果を校内や大学等で発表した。普通コースにおいても年度当初の計画どおりに実施することができた。「あおり創造学」は1学年全生徒が取り組んだ。 ② 講師として東京学芸大学名誉教授など、外部教員も交えたオンライン開催を含め、年間3回の研究会を開催し、英語4技能評価に対応できる本校独自の英語授業である「三本木メソッド」の研究を進めた。また、GSコースの数学・英語において速習・標準のクラス分けを行い、学力の伸長を図った。	A	・GSコースの取組は素晴らしく、受験向けではないかもしれないが、今後も探究活動を推進してほしい。自分自身が何に没頭できるのかわかるきっかけにもなる。そのため、将来の目標設定もしやすく、目標がある子は強いと思う。 ・進路情報も含め、GSコースの活動について、保護者や地域に対し、これまで以上に情報発信してほしい。	① GSコースについては、引き続き各分掌・学年・教科などの担当者と連絡を密にして運営する。特に、2学年GSコースの「総合的な探究の時間」について、課題研究型とテーマ追究型を適切に運営する。 ② 英語については、これまでの研究成果を「シン三本木メソッド」として定着させ、実践を通して深化させたことを発信していく。また、中高一貫の特徴を生かすためにも、中高の理数・英語教員の連携を強め、学力の伸長につなげられる方策を検討する。
5	① 教育公務員としての服務規律の確保 ② 多忙化解消によるワークライフバランスの確保	① 教職員の服務規律の確保の徹底について、県教育委員会からの通知や研修資料等をもとに全職員で定期的に確認する。 ② ワークライフバランスを確保できるよう、業務の効率化を図り、心身の健康を保持する。管理職が率先して休暇を取得し、定時退勤を心がけるなど、休暇を取りやすい環境づくりをめざす。	① 県教育委員会から発表される県内での懲戒処分のGroup Sessionでの情報共有、職員朝会や職員会議等で、非違行為の未然防止を行った。 ② 定期的な学年・分掌会議以外の場でも生徒についての情報交換や学校課題について話し合う場面が見られるようになった。	B	・教職員の皆さんが心身ともに健康であってほしい。主任の先生方に仕事に偏っていないか心配である。副主任の先生をもっと活用してもよいのではないかな。 ・世代別で仕事に対する考え方の違いが拡大しているように思う。教職員間で相談しやすい環境づくりが大切。 ・教師側の負担もあるが、部活動は先輩後輩の人間関係を学ぶ貴重な場となるので、今後の在り方を継続して検討してほしい。	① 定期的に服務規律の確認を行っていく。 ② 学校行事や各分掌の業務内容を精査し、業務の効率化を図る。 ③ 教職員の家庭における行事がある際は、積極的に休暇を取得するよう促す。業務に余裕ができたら休暇を取りやすい環境づくりのため、管理職が率先して休暇を取得する。
(11) 総括	今年度の目標は概ね達成されたといえるが、引き続きICTを活用した課題の工夫や学校の活動内容の情報発信など、積極的な取り組みが必要とされている。保護者や地域の方々の評価・意見をに受けとめ、学校が抱える課題を1つ1つ解決するよう取り組みを継続したい。					